

「実践」と「振り返り」を繰り返し 学ぶ意欲をかきたてる

高知大学 CBI (コラボレーション・ベースド・インターンシップ)



池田啓実氏

人文学部教授
兼 総合教育センター
キャリア形成支援部門長

経験から学ぶためには、「思いとつながりを大事にしなが、挑戦し、振り返り、楽しみながら仕事をする事」が重要だという*。高知大学の長期インターンシッププログラムCBIが成果を出している理由の1つに、この経験学習の仕組みが機能していると考えられる。同大学がCBIを導入した背景には、大学進学率が50%を超えるなか、学生が学ぶ目的を見出せず、学習意欲が低下していることがある。「期間限定の社員として、企業やNPOなどで企画立案や業務遂行に臨みます。社会に関わることで、信頼が人をつなぐことや学ぶことの大切さを実感させる狙いです」と、人文学部教授・池田啓実氏は語る。

長期間、社員と同様の仕事に取り組むCBIでは、参加する学生に「本気」とやりきる「覚悟」が求められる。そのため、準備は早い段階から始まる。右頁の「CBIの流れ」を参照してほしい。まず、1年次前期開講の「自律協働入門」では、さまざまな人と協働するなかで、自分は何を大切に行動するのかという軸を確立する。この授業を通じて、広い社会で深く人と関わりたいと希望し、CBIに興味を持った学生は、後期に「CBI企画立案」を履修する。授業では、チームで企業の経営者を訪問し、企業がインターンシップをやる意味について話を聞く。

「目的は、仲間や訪問先企業との良好な関係性を築くこと。また、企業と自分、それぞれにとって有益なインターンシップにするために、自分はどの働き方がいいのか考えてほしいのです」(池田氏)

こうして、早ければ1年生の春休みから実習に入る。実習先は、IT、小売り、NPOなど。業態も規模もさまざまだが、一様に仕事を楽しみ、また、多くの失敗を経験して帰ってくる。そして、実習後の自己分析で、実習経験を教員と一緒に振り返り、自分には何が足りなくて、何を学ばなければならないのか考える。

「CBI実習を体験した学生は、授業に臨む姿勢が変わります。実習中に、幾度となく自分の無力さを味わうことで、自発的に学ぼうとするのです」(池田氏)

CBIは、狙い通り、学びの動機づけに成功しているわけだが、この流れは、経験学習のプロセスに重なる。1年次で、仕事への「思い」を養い、他者との「つながり」の大切さを学ぶ。実習で新しいことに「挑戦し」、その経験を「振り返る」ことで、自分の学ぶべきことを見つけ、意欲的に学ぶようになる。その結果、右頁の学生たちのコメントに見られるように、体験者は大きく成長している。「若手が成長しない」という課題に向き合う1つの処方箋がここにある。

CBI実習 (社会協働インターンシップ)

●概要/共通専門科目として開講する、キャリア形成支援科目集中講義。最長6カ月(休暇含む)に及ぶ長期のインターンシップ ●目的/学びの動機づけと自律性の向上 ●履修生/必修の事前学習は1年生のみが対象。全学部で受講は可能だが、学年積み上げ型の必修科目が少ない人文学部の学生が多い ●実習時期/1年の春休みから2年の夏休みの期間 ●実習先/首都圏の企業や団体 ●実習単位/1カ月実働20日で2単位、最大4カ月分8単位を付与。単位化には実習後の自己分析の受講が義務づけられており、2単位の事前学習なども含めると14単位を取得できる。

*「職場が生きる 人が育つ「経験学習」入門」 松尾睦著 (ダイヤモンド社)

CBIの流れ

1年次前期 自律協働入門

期間限定で、地域活性や国際協力などの活動をしている学生団体に参加し、毎週の授業で活動を振り返る。定員は60人。



「日曜朝市」は、高知県名物の1つだが、出店者の高齢化が課題となっている。その「日曜朝市」を盛り上げる学生団体の活動に加わる。



活動の最終報告の準備。各チームには3年生がファシリテーターとして入り、議論を進める。

1年次後期 CBI企画立案（事前学習）

講義の大きな流れは、チームづくり→企業訪問（4週間）→振り返り（2週間）。このほかに、授業外で開催されるスキルアップセミナーへの出席を義務づけ、伝達力、傾聴力、取材力を獲得させる。また、希望者には、実習候補先である首都圏の企業や団体を訪問するバスツアーも用意している。定員16人。



「CBI企画立案」では、チームづくりに時間をかける。まずは「語る場、聞く場」を設けてお互いを理解し、合宿（写真）で、関係性を強くする。その成果が、4週間続く企業訪問で試される。

1年次春期休暇から2年次夏期休暇
までの期間のうち最大6カ月

CBI実習

実習中は日報と出勤簿の作成が必須。また、CBI実習統括教員が月1回首都圏に向向いて行く出前講義でも、実習を振り返る。なお、実習は長期かつ生活圏を離れて行うため、学外のインターンシップの支援機関と協働しており、受入先とのマッチングや、実習中の学生のケアなどは支援機関が担っている。現在の4年生の参加者は12人、震災の影響で3年生は3人。



日本茶専門店・川本屋の新規事業「横濱いせぶらカフェ」で実習中の森田あずささん（人文学部2年）。実習先では、インターネット事業のサポートのほか、新商品の開発、イベントの企画などを担当している（写真はイベント会場）。代表の川井喜和氏は「学生ならではの柔軟な考え方や、若い推進力に期待している」と語る。

2年次9月 CBI自己分析（事後学習）

実習の振り返りと今後のアクションプランを作成する。

CBIを体験しました

知識欲が強くなりました

石川華月さん
人文学部4年

実習で、アルバイト社員のマニュアル作成に関わったとき、どのように書けば正しく伝わるのかという点に、とても悩みました。それ以来、自分の発言や行動の先にある「相手」を意識するようになり、友人には「実習に行って、丸くなった」と言われます。また、実習先の東京では、高知県について質問されることが多く、自分のバックボーンは高知県ののだと再認識しました。県に関する知識を深めようと、実習後は、地域活性化の学生団体に参加して地域の方の話を聞く、授業で県の産業構造について学ぶなど、新しいことに挑戦しています。



視野が広がりました

太尾郁恵さん
人文学部3年

別の授業のフィールドワークで、地域産業の活性化に取り組んだとき、結局は何もできず、「お客様」でしかない自分が情けなくなりました。馴れ合いの関係から脱することで自分を変えたいと思ったのが、受講の理由です。街づくりの基本を学ぶため、実習先は、熱海の街づくりを支援するNPOに決めました。学生ボランティアではなく、責任のある立場で地域に関わることで、街づくりにはどんな人材が必要なのかを理解できました。さらに視野を広げるために、夏休みには大学が主催する海外実習に参加し、タイの地域活性化に取り組みます。

